

論文

価値観共有を目的としたナラティブの協働構築

三井 久美子*

要旨

本稿では、日常会話の中でなされる個人的な過去の経験談としてのナラティブについて、特に聞き手が語られたナラティブをいかに理解したかを示す反応部(response sequence)に注目し、そこで聞き手がナラティブの協働構築に積極的に関わっている事例を分析した。

聞き手を含め会話参加者全員によるナラティブの協働構築については、語り手が過去に経験した面白い話や驚いた話等を笑える話として語る上で、聞き手がいかにナラティブの笑いを増幅させ、ナラティブの協働構築に役立っているかを分析しているものは多い。そこで本稿では、笑いを共有することを目的とするものではなく、参加者間で同じ価値観を共有していることを確認するためにナラティブの協働構築がなされている事例を分析対象とした。

その結果、ナラティブのポイントを聞き手が適切に理解したことを、直接的に評価を述べることで示すだけでなく、参加者全員で、ナラティブの登場人物についての評価やその行動の背景についての仮説の協働構築を繰り返すことで、共通の価値観を有していることを確認し合っていることが明らかになった。さらに、ナラティブを「笑える話」として再設定する遊びのフレームへのシフトも見られたが、これはナラティブの評価や仮説構築の繰り返しの中で、「笑い」を共有することで親和性を高めつつ、話の流れに区切りをつけることに役立っていると考えられる。このように参加者間で共通した価値観を有していることの確認となるナラティブは、笑える話等の笑いの協働構築とは異なる手続きが、反応部においてなされていることが明らかになった。

キーワード

ナラティブ 聞き手の役割 協働構築 価値観の共有

* 立命館大学国際関係学部 准教授

目 次

- I. はじめに
- II. 先行研究
 - 1. ナラティブの連鎖組織
 - 2. ナラティブにおける聞き手の参与の仕方と
ナラティブの協働構築
 - (1) 笑いの協働構築
 - (2) 理論構築活動としてのナラティブ
- III. データの概要と分析方法
- IV. 分析結果と考察
 - 1. ナラティブの展開部
 - 2. ナラティブの反応部
 - (1) ナラティブ理論への対峙 1
 - (2) ナラティブ理論への対峙 2
 - (3) ナラティブ仮説の協働構築
 - 3. まとめ
- V. おわりに

I. はじめに

過去に起こった個人的な経験談を語るナラティブは、さまざまな分野で研究がなされている。日本語教育においても、日本語学習者が過去の経験談を語ることの難しさが指摘されており(木田・小玉, 2001; 加藤, 2003 他), その教育の必要性から、会話教育への応用を目的とした研究もなされている。しかし、それらの研究では、テレビのトークショー等の語り手が決められた場で、テーマに沿った過去の特異な出来事や面白い話を語るというナラティブを分析しているものが多く(加藤, 2003; 榎原, 2010 等), その分析対象となっているものも語り手の言語行動が中心である。

一方、会話分析や相互行為分析、社会言語学においては、ナラティブ¹⁾は語り手だけで形成されるものではなく、聞き手の果たす役割が大きく、会話参加者が協働で構築していくものであることが指摘されており(Sacks, 1974; Schegloff, 1992; Ochs et al., 1992 等), 日本語会話においても同様に語り手と聞き手の相互行為によってナラティブが構築されていることが指摘されている(西川, 2005; 西阪, 2008; Szatrowski, 2010; 井出, 2013 等)。このことから、聞き手の参与の仕方についても、会話教育においては指導するべきであり、そのためには日常会話に見られるナラティブについて、分析する必要がある。

日常会話で見られるナラティブは、テレビのトークショーで見られるように常に語り手が決められ、語るべきテーマが存在した上でなされるわけではなく、会話参加者や話題の流れによって自然に会話の中に埋め込まれていくものである。そのため、会話参加者、話題、その場

の状況等に応じて、ナラティブが語られる意義も異なってくる。ユニークな体験談を共有し、場を盛り上げるためになされる場合もあろうし、新しいニュースとして驚きを共有するためになされる場合もあろう。このような過去の時点の出来事について、「今ここ」で語る意味が常にナラティブにおいては問われるが、語られたナラティブの意義、あるいはそれ自体が会話の中で果たす役割というものが、参加者の相互交渉によって形成されると言われている（Norrick, 2000; Ochs&Capps, 2001; Karatsu, 2012 等）。Polanyi (1985) や Ochs (1997) は、1つの「物語」は出来事や行動についてのモラル的評価や心的態度等の語るべきポイントを有していると述べているが、これらのポイントを会話参加者が理解し、共有していく過程において、ナラティブの意義が協働構築されると言えるだろう。

ナラティブの協働構築について分析しているナラティブ研究では、語り手が過去に経験した面白い話や驚いた話等を笑える話として語る上で、聞き手がいかにナラティブの笑いを増幅させ、ナラティブの協働構築に役立っているかを分析しているものが多い（西阪, 2008 ; 井出, 2013 ; 山本, 2013 等）。このような例では、ナラティブの面白さを共有することがナラティブの意義とされる。しかし、同じ価値観を参加者が有していることを確認して同意し合い、共感を深めていくことが重視されるナラティブも存在する。このように意義が異なるナラティブでは、聞き手の反応も異なってくるであろう。そこで本稿では、ナラティブの反応部（response sequence ; Sacks, 1974）において、聞き手がナラティブの協働構築に積極的に関わっている1つの事例を取り上げ、会話参加者がどのようにナラティブを協働構築しつつ、価値観の共有を行っているかを検証したい。

II. 先行研究

分析に当たり、まず会話分析においてナラティブの連鎖組織について提唱する Sacks (1972) からナラティブの「展開部」と「反応部」を概観する。次に、聞き手の参加がナラティブの協働構築に貢献している先行研究を挙げる。

1. ナラティブの連鎖組織

Sacks (1974, p.337) は、ナラティブの連鎖組織は、連続し隣り合って位置する「前置き (preface sequence)」、「展開部 (telling sequence)」、「反応部 (response sequence)」という3つの部分からなるとしている。「前置き」は、ナラティブを始めることが参加者の間で認められるかを確認する部分である。「展開部」は、ナラティブの開始を参加者に認められた語り手がその結末・オチまで語る部分である。ここでは基本的に話し手がターンを保持し、聞き取れなかったり、理解に問題が生じた場合を除いては、聞き手は実質的発話は控える。そして結末・

オチが語られたあとに「反応部」が続く。ここでは、通常の話者交替が復活し、聞き手がナラティブを正しく理解したかを示すために、笑ったり、評価したり、共感を示したりする。聞き手の反応によっては語り手は語りを繰り返す必要もあり、聞き手がどのようにナラティブを捉えたか、その反応によって、反応部の展開も変わってくる。Sacks はこのようにナラティブを語るということが参加者が協働でなし遂げる組織された現象であることを示している。

2. ナラティブにおける聞き手の参与の仕方とナラティブの協働構築

(1) 笑いの協働構築

反応部においては、聞き手はそのナラティブを適切に理解したかを示さなければならないが、特にそのナラティブが何のためになされたか、そのポイント理解の表明が肝要となる。西阪 (2008, p.281) は、物語に対する理解・態度を示すための最も有効な手段の一つとして、聞き手が物語の山場を「演じること」を挙げ、「演技は、一方で、物語がどう理解されたかを明らかにするとともに、他方で、物語の主眼をさらに協調された形で提示することにより、語り手が自分の物語に対してとっていた態度への強い同調を示すこともできる」と述べている。この「演じること」は特に面白い話の理解を示すために有効である。井出 (2013) は、語り手の語る過去の出来事時の語り手、あるいは登場人物の思考内容を「心の声」として、聞き手があたかもその場にいたかのように引用している例を示し、笑いを協働で構築している事例を挙げている。この「心の声」とは実際に当時発せられたものではなく、Tannen (1989) が「創作対話」(constructed dialogue) と呼ぶ、虚構的・擬似的な声である。そして、オチとなる場面で、聞き手が「心の声」を発してフロアに参加し、語り手、聞き手がともに、「お前逃げろや」「はよ逃げろ」(p.56) のように擬似的な声を挿入していくことで、その場面の可笑しさが共有され、増幅されている例を挙げている。そして、協働で達成された笑いは、話の評価や結末としてのオチが共有されたことの表れであり、同時に話題終了のマーカーストしても機能していると述べている。

山本 (2013) は、このようなナラティブ中の声として聞かれる発話を「セリフ発話」と呼び、特に「受け手²⁾のセリフ発話」に焦点を当ててその位置やデザインを分析し、受け手のセリフ発話がナラティブを構築する上で積極的な貢献となっていることを示している。ナラティブが笑うべきものとして語られ、その反応として笑いが起きた後、受け手によってなされるセリフ発話は、笑うべき焦点を詳細化する形で再構成され、さらなる笑いの連鎖を生み出す契機となる。そして、参加者全員で同じ「セリフ発話+みたいな」という形式の発話を連発することで、「冗談の連鎖」を拡張し、ナラティブが面白い「語るに値するものであった」ことを、確認し合う手続きとなっていると述べている。また、このようにナラティブの「面白さ」を受け手の側から取り上げ、参加者が共に笑い合う機会を作り出すことにより、終息に向かう環境を

作り出すとしている。

以上のように、面白い話としてナラティブが語られる場合、笑うべきオチが示された後に、聞き手側は登場人物の心の声を引用してみせることで、話のポイントを的確に理解していることを示し、さらにそれが契機となって参加者が協働して笑いを増幅し、面白い話として語られたナラティブの意義を確認し合い、それによってナラティブが終了するという手続きがなされていると言えよう。

(2) 理論構築活動としてのナラティブ

次に、ナラティブを会話参加者が協働で行う理論構築活動の1つとして捉えている先行研究を挙げる。家族の夕飯時になされる会話を分析した Ochs et al. (1992) は、語り手の語るナラティブが、参加者によって妥当であるかどうかを検証され、最終的に必要であれば修正が加えられるという過程を通して協働で構築されている事例を挙げ、これは、科学者が理論を立て、その理論が検証、解体され、再構築されることと同様であり、家族間におけるナラティブは、協働で行われる理論構築活動となると述べている。Ochs et al. は、これらの活動を「説明部 (explanatory component)」、「対峙可能部 (challenge component)³⁾」、「修正部 (redrafting component)」に分けているが、「対峙可能部」では、参加者が登場人物や語り手の考え方や見方、出来事についての実事や性質等に言及することにより、語り手を支持したり、語り手のナラティブに疑問を呈したり、反論したりしている事例を挙げている。

この Ochs et al. の理論構築活動の概念を基に、日本語におけるナラティブの協働形成過程を例証したのが西川 (2005) である。西川は親しい友人間の会話の中で、Ochs et al. の提示した理論構築活動の特性（「説明部」「対峙可能部」「修正部」）が観察できる事例を挙げ、ナラティブ全体を通してこの3つの部分が繰り返され、最終的に参加者の合意がなされたことによりナラティブが終了していることを明らかにした。その過程において、ナラティブの修正案は、語り手のみによって提示されるものではなく、聞き手による対峙を解決すべく、語り手と聞き手双方から繰り返し提示され、追加修正がなされたとしている。この西川の事例は、対峙の対象になった部分が解決されたことでナラティブが終了しており、ナラティブにおける参加者の行為が、聞き手がストーリーを理解できるように、出来事を説明するに十分な理論を構築することに志向されていたものである。このように、話の筋を通すために聞き手が積極的に参加し、参加者協働でナラティブの理論を構築する活動も、ナラティブの協働構築として重要な例の1つであろう。

以上、聞き手の参与によるナラティブの協働構築についての先行研究を概観した。ナラティブの意義によって、聞き手の参与の仕方も異なってくると考えられるが、面白さを志向しないナラティブにおいては、笑える話におけるセリフ発話による冗談の連鎖のように、聞き手がナ

ラティブのポイントを理解したことを効果的に示し、ナラティブの語られた意義を参与者協働で高めるためにはどのような展開がありうるのであろうか。本稿では価値観の共有を意義とする一事例を取り上げ、反応部を中心に分析を試みる。

Ⅲ. データの概要と分析方法

本節では、分析対象となるデータと分析方法について述べる。

本稿で分析対象とするデータは、日常会話における友人同士の雑談を録音したものの中に見られたナラティブである。会話参加者は3名であり、いずれも関西在住の40代前半の女性である。3名は職場の同僚であるが、個人的な話もする友人のような間柄であり、データ会話はレストランでの食事中になされた会話である。データ分析にあたっては、Sacks (1974) の連鎖組織の概念(「前置き」「展開部」「反応部」)を用いて、これらの連鎖組織が見られる箇所をナラティブと判断した。なお、語り手が発話ターンを保持し、過去の連続した出来事を語る「展開部」がナラティブの中心と言えるが、展開部のきっかけとなる「前置き」、さらに「展開部」の後の参加者の反応がなされる「反応部」も含めた一連のやり取りを、広義の意味で「ナラティブ」とする。

ここで、本稿で取り上げるデータの限界点について述べておく。このデータは、ナラティブの展開部のはじめで録音が始まったものであるため、語られるきっかけとなる部分が採取されていない。そのため、どのようなきっかけで語り手Aがナラティブを始めたかは不明であり、語り手が話のポイントを予告する部分が欠けている。しかし、反応部が長く続き、聞き手が積極的にナラティブ構築に参加している例として分析するには興味深いものであったため、今回は反応部においてどのような展開がなされているか事例研究として取り上げたい。

なお、展開部と反応部の境界について、本稿ではSacks (1974) にならい、展開部は語り手が発話権を保持し、出来事の背景や展開を述べている部分とし、語りの結末が示され、聞き手が笑いや驚き等、あいづち的な発話によってポイントを理解したと確認できるところまでとする。その後、通常の話者交替が再開され、聞き手⁴⁾が実質的な発話をしながら、ナラティブに関する質問や評価を述べ始めるところを反応部とし、参与者によるナラティブそれ自体への言及が終わり、次の話題へと話題がシフトしたと認められるところまでをそのナラティブの反応部とする。

Ⅳ. 分析結果と考察

本節では、まずナラティブの展開部について取り上げ、次にナラティブの反応部について、

いくつかの区切りに分けながら見ていきたい。

1. ナラティブの展開部

まず、語り手を中心となってナラティブを語る展開部について見ていく。前節で述べたように、このデータは語り手 A が出来事の設定を述べている途中から始まる。途中からのためわかりにくくなっているが、このナラティブは語り手 A が駅のホームで電車を待っている時に、同じく電車を待っていた若い女性 2 人の会話を立ち聞きしているという状況である。この部分では、主に実質的な発話をしているのは語り手 A であり、B と C は実質的な発話は控え、「うん」等の継続支持標識（申田，2009）によって、語り手 A の語りの継続を促すという聞き手の立場になっている。

<抜粋 1 > ⁵⁾

01A: あ の : : は な (0.3) 待ってる間の話を聞いているだけでも、↑ 1 人の子には彼氏がい

02 : るんだなっていうのが [わかって. その], じ, 地元にな.

03B: [hhhhhhhhhhhh.]

04B: うん.

05A: でまなんか, [彼氏がー

06B: [あ, 頼みます?

(ウェイトレスを呼ぶ 2 行省略)

09 (2.0)

10A: 「彼氏が彼氏が」言うたはっ↓て. (0.3) たら:, (.) 彼氏が:, (.) 入って来はって.

11B: は [い?

12A: [入場券で.

13C: うん.

14B: あ : [: :].

15A: [「よ : : 」みたいな感じで.

16C: うん.

17A: そしたら, 今まで 2 人で話してたのに, 彼氏が来たらもう, その子彼氏としかしゃ

18 : べらない?

19B: ↓あ↓ : ↓ : [↓ :

20A: [その子に↑紹↑介もしないんですよ.

21B: え : [: :].

22C: [↑え↑ :] ↑ : ↑ : ↑ [:].

語り手 A は 01-02 行目で、2 人の話から 1 人の女性には彼氏がいるということがわかった、と出来事の背景を述べている。05 行目で「でまなんか、彼氏がー」と述べたところで、B が料理の注文を促し、A がそれに応じてウェイトレスに声をかけたため、A の語りは一時中断する (06-09 行目)。中断の後の 10 行目で A は、中断する直前に 05 行目で述べた「彼氏が」を再度述べ、語りを再開している。「自分の彼氏のことについて 1 人の女の子が話していた」という出来事が起こる背景状況を述べた上で、思いがけない出来事がその後起こることを表す接続詞「たら:、」(加藤, 2003) と、新たな登場人物となる「彼氏が:、」をマイクロポーズで区切りながら、一語ずつ強勢をつけ、「彼氏が実際にやってきた」という出来事が新しく展開し始めたことを強調している。A の 10 行目の発話に対し、B は「はい?」と一度聞き返すが (11 行目)、14 行目で「あ: : : .」と理解を示し、C は 13 行目、16 行目で「うん」と理解を示す継続支持をしている。A は 17-18 行目で「それまで話していた友人とは話さず、彼氏とだけ話していた」という出来事を述べるが、「それまで 2 人で話してたのに」という逆接の接続助詞「のに」の使用、さらに「彼氏としかしゃべらない」という助詞「しか」の使用等により、「それまで話していた友人を無視して彼氏とだけ話すべきではない」という A の考えに反した結果であったことが表されるようデザインされている。ここまでの A の語り方から、このナラティブが、A の予想と反する成り行きであったことを表していることが伺えるが、B と C の反応が、19 行目の B による理解を示す「↓あ↓: ↓: ↓:」のみであったため、A はさらに 20 行目で「その子に↑紹↑介もしないんですよ。」と情報を追加している。これは「紹介もしない」ととりたて助詞「も」を使用していることにより、「少なくとも紹介はすべきだ」と A は考えているが、その最低限すべきこともなされなかったという A の評価を表している。これにより、B と C は A のナラティブの驚くべき点を理解し、即座に「え: : : .」(21 行目)、「↑え↑: ↑: ↑: ↑: .」(22 行目) という驚きの反応を返している。B と C のこの反応はほぼ同時になされており、B は声を大きくすることにより、C は高く長く発話することで、驚きの強さを表している。

ここまでの A の語りにより、出来事の結果が意外なものとして述べられ、それを理解した B と C は、すぐに驚きの反応を返している。この後で、B と C は実質的な発話を始めており、A が中心的な話者となっていた形から通常の話者交替へと変化していくが、ここからをナラティブの反応部として次節で見していきたい。

2. ナラティブの反応部

反応部では、通常の話者交替が再開され、聞き手による語りの結末やポイントについての理解が適切な形で示される (Sacks, 1974, pp.137-138)。本節では、本データにおける反応部について、部分に分けながら分析することで、どのように A が示したナラティブの評価を会話

参加者で共有していくかを考察する。展開部を部分に分ける際には、会話参加者から同一評価が繰り返されたり、沈黙が続いたり等、新しい情報が提供されず、会話が停滞し、ナラティブを終了へと志向することが可能となっている箇所を区切りとした。

(1) ナラティブ理論⁶⁾への対峙⁷⁾ 1

聞き手は、理解に問題が生じる場合はここでその問題を提示することも可能である (Schegloff, 1992, pp.45-46)。本データにおいて、特に反応部の前半で聞き手 B と C から、「彼と彼女だけで話し、友人は会話に加わらなかった」という状況について、考えられる別の可能性や語られなかった側面についての質問がなされたため、Ochs et al. (1992) の用語を用い、この部分を「ナラティブ理論への対峙」とする。

<抜粋 2 >

- 20A: [その子に↑紹↑介もしないんですよ.]
- 21B: え: [: :].
- 22C: [↑え↑:] ↑: ↑: ↑ [:].
- 23B: [え] 知ってるわけじゃないんですか.
- 24A: え (0.3) 多分>知らない, と思う<. だって, 何にも, ひと,
- 25 : いっさい [話さ] なかつ [たから]. (A の話の途中で注文を取りに来る)
- (中略: 料理を注文する 26-35 行目)
- 36 (1.2)
- 37B: ↓え↓: [↓: ↓:].
- 38A: [だから:] 多分: : 知り合いではない?
- 39B: あそうやね: .
- 40A: うん.
- 41A: もうなんか彼氏が来たら「↑あ↑: ↑:」みたいな感じでお互い二人の世界になって.
- 42C: かわいそう.
- 43A: こっちの子はもう.

前節でも見たように、A の語りポイントを理解する第一の反応として、それぞれ 21 行目と 22 行目で B と C もまず驚きを表している。そしてその後すぐ B は「え知ってるわけじゃないんですか。」と情報要求をし (23 行目)、「彼氏と友人が知り合いだったので、紹介しなかったのではないか」という別の解釈を提示し、その可能性を尋ねている。これに対し、A は料理の注文で中断されながらも 24、25、38 行目で「一切話さなかったの」という根拠と共に、

に点と点っていうか、線じゃないよね。」と登場人物の行動について B は意見を述べているが、この発話から「線」であるべきものが「点」であるという、自分たちのコミュニケーションとは異なるものであるという評価が伺える。B のこの発話の途中「コミュニケーションが点と点」の辺りから、A も 48 行目で「そうそうそう」と同意を重ね、「だから：、」と B の発話を理由として関連付けた上で、「え：、え：：って感じでほんとに。」（49 行目）と語りの場面に戻り当時の自分自身の驚きを引用の形で述べている。これにより、A の驚きの理由が B の意見（自分たちとは異なるコミュニケーションスタイルを持つ登場人物たちの行動）に基づくものであり、B の理解が正しいことを承認したと言える。

B はさらに 52 行目で、「普通紹介しないと↑気↑まずいじゃないですか。」と「ないですか」という同意要求の形で、「普通」つまり「自分たち」とは異なる登場人物の行動に対し、「気まずい」という否定的な評価を述べ、A も B の「気まずい」を利用して「でしょう？」と重ね合わせ、同意を示している。さらに 55 行目で、紹介がなされなかった状況を「でも彼氏が来たらこっちの子はもう、ないもの？」と、41、43 行目の「彼氏が来たら」「こっちの子はもう」を再利用しつつ、登場人物が気まずさを感じていなかったという状況を補足説明する。B も 56 行目でそれに対して「え：：」と驚きを表してから、57 行目で「シャットアウト？」と、A が「こっちの子はもうないもの？」と表現したことを、別の否定的な表現で言い換えている。そして 59 行目で「わ：でも分かる気するな、それもなんかそういう人たち。」と登場人物たちを「そういう人たち」と自分たちとは別のグループに属する人たちとカテゴライズし、C も 60 行目で「う：：ん」と同意する。これに対し、A は 61 行目で「なんかおかしくないですか。」と直接的に「おかしい」という形容詞を用い、否定的評価の同意要求をしているが、B は即座に「おかしい」と A の表現を繰り返して同意を示し（62 行目）、C もほぼ同時に「う：：ん」と同意することで（63 行目）、登場人物たちの行動について否定的な「おかしい」という評価を、この段階で明確に共有している。

<抜粋 4 >

64A : って¥おばちゃんは後ろで思ってたんです¥.

65B : hhh おばちゃんは hhh

66A : ¥紹介しなくて [いいの? ¥

67B : [hh.hhhhhhh.

68C : ¥紹介してあげな¥って. hhh

69A : そうそうそうそう. ¥いれてあげなこの子も¥ [って.

70B : [っていうかいづらいですよ.

71A : う：：ん.

72 (1.2)

73B : もその感覚はわ [からん.

74A : [わからへん.

会話参加者の間で「おかしい」という直接的評価を共有した直後、語り手 A は 64 行目で「って♡おばちゃんは後ろで思ってたんです♡。」と当時の思考について言及することで、「おかしい」という直接的評価を語りの世界の中の語り手本人の思考と結びつけ、ナラティブのポイントとしても明確にしている。そしてこの発話においては、語り手である自分自身を「おばちゃん」と称し、さらに笑い混じりに発話することで笑いのフレーム⁸⁾へと移行している。B は 68 行目で A の発話を受け、「hhh おばちゃんは hhh」と笑いで応じており、さらに A は 66 行目で「♡紹介しなくていいの?♡」と当時の自分自身の思考を引用するが、C も 68 行目で同様に「♡紹介してあげな♡って。」と A の思考の引用を行う。A も「そうそうそうそう」と C の引用を承認しつつ、「♡いれてあげなこの子も♡って。」とさらに引用を続けている。語りの場にいなかった聞き手も含めた会話参加者が、語りの登場人物の「声」を引用し合い、協働で笑いを作り上げていくことは、特に面白い話として語られたナラティブで顕著であり、面白い話としてのポイントに対する適切な理解・評価を共有し、ナラティブを終結へと導くことができる(西阪 2008 ; 井出 2013 ; 山本 2013 等)。このデータにおいては、A のナラティブは笑い話としてなされておらず、「登場人物たちの行動がおかしい」ことがナラティブのポイントであったが、64 行目から語り手 A を「若者達を観察するおばちゃん」として位置づけ、さらに「紹介しなくていいの?」「紹介してあげな」と A の心の声を参加者で創作し、引用し合うことで、笑いを共有し、A のナラティブを「笑える話」として「遊び」のフレームへシフトしている。しかし、B は 70 行目で「っていかいづらいですよ」という、B が 52 行目で行った「紹介しないと気まずい」という評価と同様の評価を行うことで、再びナラティブの評価へ引き戻している。A もこれに対して「う : : ん」と同意しているが、他には実質的な発話がなされなかったため、1.2 秒の沈黙の後、B が「もその感覚はわからん」と登場人物達の感覚について否定的な直接的評価を行い、A も述部の「わからへん」を先取りして重ねあうことで、この評価を共有している。

ここまでの流れを整理する。まず、聞き手 B は、A のナラティブ理論をより解釈がしやすいものにする可能性を尋ねる。これをきっかけに A は自分のナラティブ理論を補強する補足的情報を追加する。聞き手 B は自分が提示した仮説を放棄し、A のナラティブ理論に対する理解を示すため、意見を提示し評価を行う。A は B の意見提示に同意し B の理解が正しいことを承認しつつ、さらにナラティブ理論の補足的情報を追加し、自身のナラティブ理論のポイントを強化する。そしてここで初めてナラティブの直接的評価を行い聞き手からも即座に同意

を得、ナラティブ理論のポイントが明示的に共有される。その後、A 自らナラティブを「笑える話」として位置づけ「遊び」のフレームシフトを行い、参加者により笑いが協働構築される。このような笑いの協働構築は「笑える話」としてナラティブを終了に向かわせることが可能となりうるが、B によりナラティブの評価が再びなされ、評価構築へと引き戻される。

以上のように、「遊び」へのフレームシフトや沈黙、同一評価の繰り返しにより、ここでこのナラティブは一度終了に向かうことが可能となるが、この後、聞き手から A によって語られなかった側面についての確認がなされる。

(2) ナラティブ理論への対峙 2

B によりナラティブに対する評価へと引き戻された後、聞き手 C から A によってまだ語られていないナラティブ理論のその後について情報要求がなされる。

<抜粋 5 >

75C : んで彼がいなくなった後、その、

76A : もうその二人でちゃんとおしゃべりしましたよ。

77C : >あ紹介してくれればいいのにとかそういうのもなく。

78A : 特に。

79C : ふ : : : ん。

80B : 求めもしないんですね。[誰 : : とか。

81A : [その子から : 別に (.) 求めるわけでもなく、横でこうやって。

82C : 邪魔しちゃいけないと思っ [て。

83A : [<そうそうそうそんな [感じ. >

84B : [あ : : : .

85A : もう彼氏来たからああじゃあ、私は関係ないみたいな。

86C : ふ : : : : ん。

75 行目で C は「んで」という先行する話題に継続することを示す接続詞を使用して、「彼がいなくなった後、その、」と語られたナラティブのその後について言及する。A はこの C の発話を情報要求として捉えてその完了を待たず、「もうその二人でちゃんとおしゃべりしましたよ。」(76 行目)と情報提供をする。これに対し、C は「>あ紹介してくれればいいのにとかそういうのもなく。」と、「友人は紹介してほしいと思っていた」という可能性を提示し、それはなかったことを確認している。B も 80 行目で「求めもしないんですね。誰 : : とか。」と、友人から紹介を求めることも特になかったということを確認している。ここでは疑問文の

形は取らず、「そういうのもなく」「求めもしないんですね」と友人からも特にリアクションがなかったことを前提とした上での確認となっている。A は B の確認に対し、「その子から：別に（.）求めるわけでもなく、横でこうやって.」と彼氏が来ていた時の友人の様子を再現する（81 行目）が、聞き手 C は 82 行目でその状況を「邪魔しちゃいけないと思って」と言い換える。A は C の発話に重なりながら即座に「そうそうそうそんな感じ」と C の表現を承認した上で、さらに 85 行目で「もう彼氏来たからああじゃあ、私は関係ないみたいな.」と、友人の様子について説明を加え、C もその説明を「ふ：：：：ん.」と受け入れている。これまでは「彼氏を友人に紹介せず、友人を無視していた」と一方の女の子に焦点を当てた説明が主であったが、この聞き手 B、C の確認により、友人の方に焦点が当てられ、「友人も特に紹介されることを求めている様子ではなかった」という状況が A によって追加され、参加者の間で共有される。この聞き手 B、C からの「確認」と語り手 A のより詳細な「情報提供」により、A の示したナラティブ理論は参加者協働で補強されていく。A によるナラティブ理論が補強された後、再び B がナラティブに対する評価を行い、さらに「遊び」のフレームへの短いシフトがあり、再度評価へと戻る。

<抜粋 6 >

- 87B : まあなんか (1.2) わかりますね、それもね、なんかわかるっていうか、その、(2.0)
- 88B : もう、(1.8) すごいね.
- 89A : ね.
- 90B : っていう (か) 観察してたんですね. hhhh [hh.h.h.
- 91C : [hhhhh
- 92A : ♪だっておばちゃんだから♪
- 93B : おばちゃ：ん. hhh
- 94B : おばちゃん [観察するよ：：hh.h.hh
- 95A : [おばちゃん、観察しちゃった. hh.h.h
- 96B : わかるわ、[でも.
- 97C : [ふ：：：：ん.
- 98 (1.8)
- 99B : へ：：：.
- 100 (2.2)

87 行目において、「まあなんか (1.2) わかりますね、それもね、」と B は評価を述べる。この評価は登場人物たちの行動について「わかる」と理解を示しているようにも受け取られる

が、これまでのBの評価提示からも、59行目で行った「わかる気もするな。それもなんかそういう人たち。」と同様の評価だと伺える。その後Bは「なんかわかるっていうか」と言い換えを予示してから、88行目で「もう、(1.8) すごいね。」とより直接的な評価を行い、登場人物に対する否定的評価を明確にしている。そして90行目で「っていうか」と話題転換の接続詞を使い、「観察してたんですね。」とAを「若者のやり取りを観察していたA」という位置づけに置き、「遊び」のフレームへとシフトする。Aもこのフレームシフトに応じ、92行目で「だっておばちゃんだから」と笑いながら述べ、自分を再び「若者を観察するおばちゃん」に位置づける。そしてBと発話を重ね合いながら「おばちゃ：：ん」「おばちゃん観察するよ：：」「おばちゃん観察しちゃった」と「おばちゃん」「観察する」という言葉をリピートすることで、「笑い」を協働構築している。しかし、すぐに96行目でBは「わかるわ、でも：」と先ほど述べた評価を繰り返し、ナラティブの評価へとフレームを戻し、Cも97行目で「ふ：：：：ん」とやや長いあいづち発話をする。〈抜粋5〉でAが「特に友人も紹介を求めているなかった」という補足情報を述べた後にもCは同様のあいづち発話をしており（79、86行目）、このあいづち発話を繰り返すことでCもBと同様にナラティブの評価へと戻っていることを示している。その後は特に実質的発話はなされず、沈黙が続く。

ここまでの流れを見てみると、BとCからAがまだ語っていなかったナラティブの側面について確認がなされ、Aはさらに自分のナラティブ理論を補強する補足情報を追加し、参与者の間で補強されたAのナラティブ理論が共有される。そして聞き手Bは以前述べた評価を再度述べ、今度はBが先導して再び「遊び」のフレームへとシフトし、AとBは協働で笑いを生み出す。そしてBは再び評価を述べ、元のフレームへと戻すが、参与者からしばらく実質的発話はなされず、ここで再度ナラティブは終了へ向かうことが可能となる。このように75行目から100行目の部分は、おおむね前項の23行から74行でなされた流れと同様の流れが見られる。この後も反応部は続くのであるが、ここから参与者はナラティブの仮説を協働で構築し始める。

(3) ナラティブ仮説の協働構築

ここから参与者達は、登場人物達の内面心理について、否定的な評価をしながら協働で仮説を構築していく。

<抜粋7>

101C： そう、じゃあ、その子も、その [：，

102B： [なんか想像力がないのよね。

103B： 例えばそうやって自分が；， そうやって彼氏と；，

- 104A : あ,
- 105B : シャ [べってたら, その子がどう思うかとか] どんな気持ちに [なるかとか,
- 106A : [>そうそうそうそう<. そんな感じそんな感じ.] [うんうんうん.
- 107B : 置いてきぼりじゃないです [か.
- 108A : [うん, うん.
- 109B : ね, 一緒に話をこうしたりとかっていうのができないんですね : .
- 110A : だから [想像力がないというか,]
- 111C : [その子も気にしてないかも] しれませんよ, もしかしたら.
- 112A : え?
- 113C : その子も気にしてない [かもしれませんよ.
- 114A : [そうそうそうそう, [そうかもしれない.
- 115B : [うんうんうん. そうやね : .

101 行目で C が「そう, じゃあ, その子も, その : ,」と実質的な発話をしかけるが, C の発話の切れ目で B が発話権を取り, 102 行目から「なんか想像力がないのよね。」と登場人物たちの内面について 109 行目まで意見を述べる。A はそれに対し, 106 行目の「>そうそうそうそう<. そんな感じそんな感じ。」のように, 発話を重ね合わせながら積極的に同意している。A は 110 行目で「だから」と B の意見からの関連を示しながら「想像力がないというか,」と述べるが, これは C の 111 行目の発話と重なり終了せずに終わる。発話権を譲られた C は 113 行目で「その子も気にしてないかもしれませんよ。」と発話を繰り返す。これは前の B の意見提示「友人がどんな気持ちになるかを考えていない」という意見に対するものであるが, 以前の A の「友人も特に紹介してほしいような様子ではなかった」という状況説明を受けての意見と言える。この C の発話の途中から A は「そうそうそうそう, そうかもしれない。」と積極的に同意し (114 行目), B も「うんうんうん. そうやね : .」と同意を示している (115 行目)。

< 抜粋 8 >

- 116A : 彼氏来たからこの子はもういない [もの.
- 117B : [はいシャットアウト [ト : .
- 118A : [私とあなたはもう別 :
- 119 : ってなってるのかもしれ [ない.
- 120C : [う : : ん.
- 121B : すごいね, 簡単にもうスイッチが切り替わる [んやね.

- 122C : [う : :ん.
 123B : はいオンオフ, みたい [な.
 124A : [そうそうそうそう.
 125C : それじゃ世界が広がらないですよ.
 126B : ね [: :
 127A : [う : :ん
 128B : すごいね.
 129 (2.3)
 130B : もうなんか感覚的にわから [ない.
 131A : [わからへん.
 132B : 理解でき [ません].
 133A : [理解] できない.
 134C : う : :ん.
 135B : ふ : ん, すごいね.
 136 (2.4)

Cの意見を受けて、116行目から119行目までAとBは交互に登場人物達の対人関係について「彼氏来たからこの子はもういないもの。」(116行目)、「はいシャットアウト : .」(117行目)、「私とあなたはもう別 :」(118行目)と表現しているが、互いの発話の末尾が重なり合い、一定のリズムを作りながら発話され、119行目で「ってなってるのかもしれない。」とBの発話も取り込んだ形でAによって述部が完成されており、協働で仮説を作り上げている。またここでは、それぞれ自分が既に述べた表現「彼氏が来たからこっちの子はもういないもの」(55行目)「シャットアウト」(57行目)等を再利用している。そしてBは自分たちの仮説を事実であるかのように「すごいね. 簡単にもうスイッチが切り替わるんやね。」と121行目で評価を述べている。Cはそれまで「う : :ん」と同意をするだけだったが、Bのこの評価を受けて、125行目で「それじゃ世界が広がらないですよ」と否定的な評価を述べる。BとAはこれに対して同意し、Bは128行目で「すごいね」という評価を繰り返す。2.3秒の沈黙の後、「もうなんか感覚的にわからない。」(130行目)、「理解できません」(132行目)と再度評価を続けるが、AもこのBの発話に「わからへん」(131行目)、「理解できない」と自身の発話を重ねている。この評価は73行目、74行目で既にBとAで協働でなされた評価であり、ここでもその評価が同じ形式で繰り返されている。その後もCの「う : :ん」という同意を示すあいづち発話(134行目)、Bの「すごいね。」という評価の繰り返し(135行目)が続き、特に実質的発話はなされず沈黙が起きる。このように一度なされた評価が繰り返されることで、ナラ

タイプのポイント共有の完了となり、再度終了を迎えることが可能となるが、やはり聞き手 B によりこの後も反応部は続けられる。

<抜粋 9 >

- 137B: めんどくさいことは全部シャットアウト [でしょ.
 138A: [>あそうそうそうそうそうく
 139B: まあ、要は.
 140A: 要はね.
 141C: う : : ん.
 142A: だからほんとその世界には自分しかいないんでしょうね.
 143B: まあそうでしょう [ね:].
 144A: [自分] と : 自分に関わりのある人?
 145C: う : [ん.
 146B: [そうやね : .
 147A: しかもその中でちゃんとランク付けがあるんで [しょうね.
 148B: [そう [やね : .
 149C: [hh
 150B: でも、お互いそれも了解済み [みたいな感じで : , 回っていつてるんやろうね].
 151A: [>そうそうそうそうそうそうそうく . あんた達で]
 152 勝手にやってみたいな.
 153B: だから友達関係もま、壊れないし : , こっちも壊れないみたいな.

137 行目で B は「めんどくさいことは全部シャットアウトでしょ。」と以前も利用した「シャットアウト」という表現を再度用いて仮説を述べ、A も B の発話に重ねる形で「>あそうそうそうそうそうく」と B の仮説を支持する。そして A は「だから」と B の発話に関連づけた上で、142, 144, 147 行目で「んでしょうね」と推量のモダリティを使いながら登場人物たちの対人観について仮説を述べる。B も「まあそうでしょうね : 」(143 行目), 「そうやね : 」(148 行目) と同意しているが、148 行目では 147 行目の A の「でしょうね」と重ねる形で「そうやね : 」と同意をした上で、150 行目で「でも、お互いそれも了解済みみたいな感じで : , 回っていつてるんやろうね。」とやはり「んやろうね」という推量の形式を用いて仮説を述べている。A はこれに対し、B の発話にオーバーラップしながら「>そうそうそうそうそうそうそうく . 」と「そう」を重ねて強く同意し、「あんた達で勝手にやってみたいな」と B の仮説を言い換えて表現し、支持する。さらに B は 153 行目で「だから友達関係もま、壊れ

ないし：、こっちも壊れないみたいな。」と A の 152 行目の発話と文末形式を「みたいな」と揃えて発話している。このようにこの部分での仮説構築では、お互いの発話を重ね合わせたリ、文末形式を揃えたり等の工夫も加えながら仮説を述べ合い、協調しあっている。

<抜粋 10 >

- 154 (0.5)
- 155B： すごいな.
- 156B： 私の人間関係ではありえないな.
- 157C： う：[ん.
- 158A： [もう古い人間なん [です. 私達は].
- 159B： [↑へ↑：↑：↑：:] ↑：↑：
- 160C： h.h. 昭 [和の人間. hhh
- 161A： [昭和の世代だか [ら. hhhhh
- 162B： [↑え↑：↑：↑：
- 163C： 昭和の [人間だから. Hhhh]
- 164B： [え：：：，そういうこと] な：：ん，それもちよっと悲しいですよ.
- 165B： なんかゆがんでるわ：：.
- 166A： ん：：. でも今の子達と私達のコミュニケーションスタイルは全然違うと思う.

B は 155 行目で再度「すごいな」という直接的評価を述べ、「私の人間関係ではありえないな。」と自分の対人観とは異なっていることを改めて述べるが、この発話をきっかけに A は「もう古い人間なんです。私達は」と会話参与者達を同じグループに属するものとして、「登場人物＝新しい人間」「私達＝古い人間」と位置づけ、対人観の違いを世代間の差としている。C はこの A の発話内の「古い人間」を「昭和の人間」と笑いながら言い換え、これが「遊び」のフレームシフトとなり、その後、A と C で「昭和の世代だから。」(161 行目)、「昭和の人間だから」(162 行目)と同じフレーズを笑いながら繰り返し、自分たちを「古い人間」の象徴として「昭和の人間」と位置づけ、それを理由だと認め合うことで、協働で笑いを生み出している。B はこの A と C の発話に対しては「↑へ↑：↑：↑：↑：↑：」(159 行目)、「↑え↑：↑：↑：↑：」(162 行目)と大きく音調を変えて反応しつつ、164 行目で「そういうことな：：ん、それもちよっと悲しいですよ。」と世代差を理由にすることに反論し、「なんかゆがんでるわ：：」と再び登場人物達の対人観に話を戻し、「ゆがんでる」と直接的評価をする。これに対し、A は「でも今の子達と私達のコミュニケーションスタイルは全然違うと思う。」と世代差を支持し、この後はコミュニケーションスタイルの違いを実証するための第二の物語へと話

が移行していき、A のナラティブについて改めて言及されることはない。

3. まとめ

以上、ナラティブの反応部を中心に、聞き手が積極的に関わり、ナラティブについての評価を参与者間で共有していく過程を見てきた。

展開部では、語り手 A が発話権を保持してナラティブを行い、聞き手 B と C は実質的な発話は控え、「うん」等の継続支持標識によって、語りへの理解と継続を示し、A の語りを支持している。聞き手 B と C は、「若い女性が友人を無視して彼氏とだけ話していた」という結果が語られると、A の示唆している結果の意外さを理解し、すぐにまず驚きの反応を示す。語りの結末が示されたと認識した聞き手 B と C は通常の話者交替に戻り、実質的な発話を始める。反応部の前半では、A のナラティブ理論に対して、B と C が別の解釈の可能性がないか確認し、それにより A が展開部よりもさらに詳細な情報を提供したり、展開部では語られなかった側面を語ったりして、A のナラティブ理論を補強する。これらを通してナラティブの評価は参与者の間にさらに明確に共有されていく。そして、評価の共有とともに、登場人物たちの行動をおかしいと感じる価値観を参与者の間に共有していることも確認されていく。反応部の後半では、A のナラティブ理論を基に登場人物たちの行動の背景となる対人観やコミュニケーションスタイルについて、参与者が協働で仮説を築き上げていく。聞き手は積極的にナラティブについての評価や意見提示を行い、語り手 A は「そうそうそう」とオーバーラップしながら聞き手の発話を認めた上で、そこに自身の評価や意見を重ねていく。このように協働で仮説を構築し、さらにそれを評価し合うことで、自分たちが共有する価値観との差異を際立たせ、参与者間の仲間意識を高めていると思われる。

そして時折、語り手 A を「若者を観察するおばちゃん」と位置づけて、ナラティブを「笑える話」として再設定する遊びのフレームへのシフトも見られたが、これも参与者の間で笑いを共有することで、仲間意識を高めると同時に、反応部に区切りをつける役割もあると思われる。

以上、本データでのナラティブにおいては、ナラティブのポイントを聞き手が適切に理解したことを示すだけでなく、さらに発展して評価や仮説を協働で構築することにより、共通の価値観を有していることを確認し合っている。そして、このようなナラティブの協働構築の過程を通して、参与者の親和性を高め、仲間意識を強めていると言える。このように共通した価値観の確認となるナラティブは、面白い話、笑える話等の反応部における笑いの協働構築とはまた異なる手続きがなされていることが伺える。

V. おわりに

以上、価値観共有を主目的としたナラティブの反応部について、1つの事例についての検討を行った。反応部において聞き手も適切な理解を示すのみでは終わらず、ナラティブに対する直接的評価や意見提示を経、さらに仮説を協働構築していくことで、価値観の共有を明確にし、仲間意識を高め、そのナラティブを「語られる価値」のあるものとして位置づけていることが明らかになった。今回のデータで観察された反応部での展開は、面白い話、笑える話等の反応部とは異なる展開であった。笑いを共有することを志向したナラティブだけではなく、このように参加者の間で価値観共有を確認し合うナラティブも、日常会話の中ではよくなされる種類のものである。会話教育の中で、日常生活における交流的な会話指導について近年その指導の必要性が高まっている（筒井，2012他）。本データの会話のように参加者間で価値観の共有を図り、仲間意識を強めていくものは、交流的な会話の中でも有用性の高いものと言えるだろう。本稿は一つの事例を取り上げたに過ぎないが、一つのナラティブを基に、参加者が協働で評価を構築することで共通した価値観を認め合い、そこにナラティブの意義を見いだしていく1つの展開例を示すことができたと考える。今後はより多くのデータを分析することで、そこに共通して見られる言語形式や連鎖形式等を検討する必要がある、今後の課題としたい。

<注>

- 1) 研究分野によって、「ナラティブ (Narrative)」, 「ストーリーテリング (storytelling)」, 「物語」など様々な用語が使われているが、本稿では「ナラティブ」という用語を統一して用いる。
- 2) 山本の用いる「受け手」は本稿での「聞き手」と同義である。
- 3) 「対峙可能部 (challenge component)」では、聞き手が常に語り手に対して対立した立場を取るわけではなく、語り手の心情を代弁したり、語り手以外の登場人物の行動を批判したりして、語り手を支持する立場に立つ場合も含まれている。なお、日本語訳は西川（2005）による。
- 4) 「反応部」においては、通常の話者交替が再開されるため、「語り手」「聞き手」という役割は適さなくなるが、便宜上、過去の出来事を語った側としての「語り手」、受け取った側としての「聞き手」という用語を統一して用いる。
- 5) 今回音声データの文字化に際しては、筒井（2012）の記号を参考にした。各記号の意味は次の通りである。

<ol style="list-style-type: none"> ① [オーバーラップの開始位置 ③ = 等号の前後の発話が途切れなく密着している ⑤ (m.n) 音声途絶えている状態の秒数 ⑦ .h 吸気音 ⑧ h 呼気音, 笑い ⑩ ¥ ¥ 記号間の発話が笑い声でなされている ⑫ 言葉 下線の発話が強く発話されている ⑭ , 語尾の音が少し下がり弾みが付いている 	<ol style="list-style-type: none"> ②] オーバーラップの終了位置 ④ (.) 0.2秒以上の短い間合い ⑥ : 直前の音が延ばされている ⑨ (h) 笑いながら発話が産出されている ⑪ ↑ ↓ 音調の極端な上がり下がり ⑬ . 語尾の音が下がり区切りがついている ⑮ ? 語尾の音が上がっている
--	---

- ⑯ < > 記号間の発話が目立って速い ⑰ < > 記号間の発話が目立って遅い
- 6) Ochs et al. (1992) は、語り手の語るナラティブを「ナラティブ理論」と呼び、これに対し、参加者が質問や修正を加えていくことでより理解しやすく筋の通った理論にしていくと述べている。本稿では、「反応部」も含めた広義のナラティブと区別するために、語り手の語るナラティブを「ナラティブ理論」と呼ぶ。
- 7) 注 3) でも述べた通り、「対峙」という言葉は必ずしも対立のみを示すのではなく、語り手への支持も含まれる。
- 8) Tannen (1993) は「interactive frame」を提唱しているが、これは会話の中でどのような行為が行われ、話し手が伝えたいことをどのように表しているかを示す枠組みである。また、この枠組みが変化することをフレームシフトと呼ぶ。

<参考文献>

(和文)

- 本田真子 (2016) 「自然談話にみられる重なるの諸相 ―親しい関係の日常談話から―」現代日本語研究会編『談話資料 日常生活のことば』295-308, ひつじ書房
- 井出里咲子 (2013) 「ナラティブにおける聞き手の役割とパフォーマンス性」佐藤彰・秦かおり編『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすのか』43-63, ひつじ書房
- 加藤陽子 (2003) 「日本語母語話者の体験談の語りについて ―談話に現れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機―」『世界の日本語教育』13 : 57-74.
- 木田真里・小玉安恵 (2001) 「上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析 ―雑談の場での経験談の談話指導に向けて―」『日本語国際センター紀要』11 : 31-49.
- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析 「話し手」と「共一成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
- 串田秀也 (2009) 「聞き手による語りの進行促進：継続指示・継続催促・継続試行」『認知科学』16 (1), 12-23.
- 李麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究：会話管理の観点から』くろしお出版
- 牧野由紀子 (2016) 「自然談話における「そうそう」の機能」現代日本語研究会編『談話資料日常生活のことば』255-273. ひつじ書房
- 松木啓子 (2008) 「ナラティブ考 ―コミュニケーション行為としての語りをめぐる―」唐須教光 (編) 『開放系言語学への招待 ―文化・認知・コミュニケーション』103-119, 慶應義塾大学出版会
- 西川玲子 (2005) 「日常会話に起こるナラティブの協働形成 ―理論構築活動としてのナラティブ―」『社会言語科学』7 (2) : 25-38
- 西阪仰 (2008) 『分散する身体 エスノメソドロジーの相互行為分析の展開』勁草書房
- 榊原芳美 (2010) 「物語の始まりと終わり ―笑いのプロは過去の経験をどう語るのか―」『日本語教育論集』20 : 119-132 関西外国語大学留学生別科
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』くろしお出版
- 山本真理 (2013) 「物語の受け手によるセリフ発話 ―物語の相互行為的展開―」『社会言語科学』16-1 : 139-159.

(英文)

- Jefferson, Gail (1978) Sequential aspects of storytelling in Conversation. In J. Schenkin (ed.) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. 219-248. New York: Academic Press.
- Karatsu, M. (2012) *Conversational Storytelling among Japanese Women*. Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

- Labov, W. (1972) *Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W. & Waletzky, J. (1967) Narrative Analysis: oral versions of personal experiences. In J. Helm (ed.) *Essays on the verbal and visual arts*, 12-44. Seattle/London: University of Washington Press.
- Lerner, G. (1992) Assisted story telling: Deploying shared knowledge as a practical matter. *Qualitative Sociology*, 15(3), 247-271.
- Maynard, S.K. (1989) *Japanese Conversation: Self-contextualization through Structure and Interactional Management*. Norwood: Ablex Publishing Corporation.
- Norrick, N. (2000) *Conversational narrative: Storytelling in everyday talk*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ochs, E. (1997) Narrative. In T.van Dijk (Ed.), *Discourse as structure and process*. 185-207. London: Sage Publications.
- Ochs, E. & Capps, L. (2001) *Living Narrative: Creating in Everyday Storytelling*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Ochs, E., Taylor, C., Rudolph, D., & Smith, R. (1992) Story-telling as a theory-building activity. *Discourse processes*, 15, 37-32.
- Polanyi, L. (1985) Conversational storytelling. In Tuen A. Van Dijk (ed.) *Handbook of discourse Analysis, vol.3 Discourse and Dialogue*, 183-201. London: Academic Press.
- Sacks, H. (1974) An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In Richard Bauman and Joel Sherzer (eds.) *Explorations in the ethnography of speaking*, 337-353. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff E.A. (1992) In another context. In A.Duranti & C.Goodwin (eds.), *Rethinking context: Languages as an interactive phenomenon*, 191-229. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E.A. (1997) "Narrative Analysis" Thirty Years Later. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1-4), 97-106.
- Szatriwski, P. (ed.) (2010) *Storytelling across Japanese conversational genre*. Amsterdam: John Benjamins.
- Tannen, D. (1989) *Talking voices: repetition, dialogue, and imaginary in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tannen, D. (1993) *Framing in discourse*. New York: Oxford University Press.

Collaborative Narrative Formation as a Means of Establishing Shared Values

Kumiko Mitsui *

Abstract

In this paper, we have analyzed cases where a recipient was actively involved in the collaborative construction of a narrative, where the narrative is defined as the experiences of an individual shared during a conversation, paying particular attention to the recipient's response sequence to determine the extent of the recipient's understanding of the narrative.

There have been many analyses of collaborative narrative construction involving all conversation participants, including the recipient, that have focused on the extent of the usefulness of the recipient's response in increasing mirth, in response to humorous or surprising tales from the speaker's own personal history. However, the aim of the current paper is not to focus on shared mirth but to analyze cases of collaborative narrative construction involving confirmation of participants' shared values.

The results of the analysis clearly indicate that all participants are engaged in the confirmation of shared values, through the evaluation of the narrative's protagonist and the collaborative construction of background hypotheses regarding the protagonist's behavior, rather than merely through directly expressing evaluations of the adequacy of the recipient's understanding of narrative features. Furthermore, while the playful reframing of a narrative as a "humorous tale" was observed, amid these narrative evaluations and hypothesis constructions, the sharing of "mirth" was considered to be useful in increasing friendliness and facilitating a change of subject. Thus, in these kinds of shared-value confirmation narratives, response sequences were seen to be procedurally distinct from the collaboratively constructed mirth found in humorous stories.

Keywords:

Narrative, Actively participating recipients, Collaborative construction, Shared values.

* Ritsumeikan University, College of International Relations, Associate Professor